

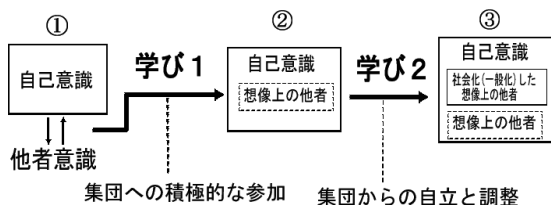
学びの深化と他者意識の発達モデル —自然発生的学びによる非自然発生的学びの形成—

宇野正明 (東北大学)

キーワード：学習モデル，他者意識，発達

問題と目的

本研究の目的は「学習方略の深化は他者意識の発達過程が再現されることで起きる」ことを，量的手段で検証する点にある。他者意識とは他者に向けられた注意や関心，意識を指し，その発達モデル(宇野 2020)では次の3つの段階を想定する。①他者意識はあるが自己の内部には取り込まれていない段階では，目の前から他者がいなくなると他者意識が維持できず消えた状態になる。②他者意識が内部に取り込まれ内的対話者(想像上他者)として活動する段階では，他者が目の前から消えても想像上の他者との対話が可能となる。③概念を一般化したことばに意識しながら置き換えることで，想像上の他者の一部が社会化された想像上の他者に質的に変化する段階である。現実以外の場面も想定することが可能となり，現実には縛られず現実を客観視または利用できる状態になる。①から②の段階を学び 1，②から③の段階を学び 2 ということにする。学びを広い関係性の枠で捉え，集団への積極的な参加とそこからの自立として描ける点がこの理論の大きなメリットとなる。



学びの深化を学びの汎化と考えると，未熟達者の学びは他者と積極的に関わる協働学習を起点に起きやすいが，他の授業形式へ汎化するには時間がかかると想定できる。一方，熟達者の汎化は想像上の他者を多く活用する一斉・家庭学習を中心広く起きると考えられる。以上の仮説を，高校生を対象に成績別の分けたグループで検証する。

方 法

調査対象 東北地方にある私立 A 高校に 2017 年に入学した 219 名(成績下位層 126 名，中位層 73，上位層 20 名)。

調査時期 年に 1 回 3 年にわたり合計 3 回調査。

調査内容 一斉授業，家庭学習，協働学習ごとにそれぞれ 8 種の学習方略を割り当て合計 24 項目に分けた 4 段階のルーブリックを作り，生徒に自己評価させる。Pearson の相関係数が.40 以上， p 値が 5%水準以下で有意な項目の割合(該当項目/64)を，授業形態ごとに調べ他の授業形態まで汎化があれば学びが深化したと考える。

結果と考察

総合学力テストの偏差値が 40 以下を成績下位グループ，60 以上を上位グループとして，相関係数が.40 以上の中程度の相関がある項目の割合を授業形態ごとに整理した。

Figure 1 中位の相関がある項目数の割合(成績下位層)

授業形態×授業形態	1年(%)	2年(%)	3年(%)
一斉×一斉	3.6	25.0	37.5
一斉×家庭	3.6	21.4	39.3
一斉×協働	0.0	7.1	39.3
家庭×一斉	3.6	28.6	39.3
家庭×家庭	5.4	37.5	46.4
家庭×協働	0.0	5.4	42.9
協働×一斉	1.8	0.0	39.3
協働×家庭	1.8	1.8	44.6
協働×協働	26.8	71.4	94.6

Figure 2 中位の相関がある項目数の割合(成績上位層)

授業形態×授業形態	1年(%)	2年(%)	3年(%)
一斉×一斉	12.5	21.4	66.1
一斉×家庭	28.6	23.2	57.1
一斉×協働	7.1	17.8	62.5
家庭×一斉	28.6	33.9	58.9
家庭×家庭	41.1	28.6	44.6
家庭×協働	12.5	23.2	42.8
協働×一斉	7.1	19.6	64.2
協働×家庭	12.5	21.4	42.0
協働×協働	19.6	28.6	78.6

成績下位層では協働×協働の割合が高いが汎化に時間がかかり，成績上位層では家庭学習を中心に汎化が速やかに広がることを確認できた。